

東陽病院内科医師

鈴木健士

健康ウォッチング

横芝町のみなさんこんにちは、2000年も残すところあとわずかとなりましたが、今回は今年4月から始まった介護保険について少し振り返ってみたいと思います。

介護保険が始まって7か月程経ちましたが、順風満帆というわけにはいかなかったところかと思えます。理由はいろいろあるでしょうが、その大きな一つは準備期間が足らなかつたのではないかと思えます。その制度の必要性を一般の方に説明し、介護支援専門員をつくり、と準備自体はもちろんなされていたのですが、実際のサービスをを行う民間のサービス事業者の確保と事業者への説明にはやや時間が足りなかつたような気がします。東陽病院にも介護型療養病床があるのですが、その運用、報酬などに対する

介護保険について

説明はギリギリまでなく、保険が始まった後もその活用の仕方は全く手探りの状態でした。保険施行後にその事業規模を大幅に縮小した大手サービス業者のニュースも目にされた方も多いと思います。

受ける利用者に満足いくサービスをするには利益を度外視する、というのでは民間業者は成り立ちません。採算を保ちつついかにサービスを充実させるかに苦心しているというのが現状だと思えます。しかし、だからと言って介護保険を止めるわけにはいかないでしょう。今後日本は間違いなく高齢化社会を迎えます。核家族化の進む今、家族の介護は当てにならなくなるのは必然です。「家族の介護こそ日本の美德」と言う某政治家の発言はわからなくはないのですが、介護の現状に即した意見とは思えません。医療保険も限界に達し、医療保険では長期の入院な



どは出来なくなっている今、それを介護保険で賄い、負担を軽くしなければこちらも破綻してしまいます。もちろん在宅介護の費用も必要です。そのためには介護保険を軌道に乗せて運用するのが最も現実的な対応と言えると思います。

介護保険はまだまだ始まったばかりのヨチヨチ歩きの状態かもしれません。しかしどんなに周到に準備された事業でも最初の時期は多少の混乱はあるものです。無駄な部分は省き、必要な部分は補いながら出来るだけ利用者の方に満足いくサービスを提供できる制度にみなさんと共に育てていきたいと思えます。



文芸

俳句

秋雨に駆け込む軒の古きかな

浅野 茂子

新涼の背もたれ高き木椅子かな

伊藤 敬子

露天風呂連峰秋の雲流る

池田 逸子

瀬戸の月明石は未だ眠らざる

岡田 雅美

観覧車都会の秋を廻りけり

勝又 和徳

波荒く九十九里浜鰯雲

向後 寛

版画展とんぼと共に見てあたり

鈴木 繁子

一本のペンに縋りて老の秋

土屋 栗水

秋燕改札口を矢の如く

藤代 ゆう

塔頭の並ぶ古刹や蟬時雨

渡辺 和秋

水清く山むらさきや里の秋

選者 鈴木 草庵

短歌

雨あがり芝生に残こる水玉を朝のひかりはしっかりとらふ

永藤 滋

アスファルトを押し上げ木の根走る怪幽字の墓を詣つと登る

秋葉 悦子

傷つけし人指し指をびんと立て
青唐辛子を刻みゆくなり

八角 三枝

溪流のたぎり落つ音の飢する
マウントレニアの山深く来つ

吉岡 信子

あまりにも大きな栗をどう茹でむ
衝動買ひをもてあましあつ

石井 ユク

踊りつつ逝きたる友の写真つけ
フラダンス踊る敬老会に

池田 春江

休耕の割り当知りつつ作付けて
再度の要請戸毎に受ける

鈴木 やす

隠元の胡麻あへ作り待ちてあつ
友達つれて息は帰るとふ

押尾 輝子

杉の秀の高きに澄める十三夜
空やはらかに黄の色をおぶ

萩原 信一

如仕事禁じられても菜大根
蒔く季くれば心さはだつ

秋葉 とく

木犀の香りに部屋を満たさむと
帰省する娘の部屋を開けゆく

西山満里子

わだかまる思ひを笑顔で聞きくるる
少し年上のわが友びとは

選者 斎藤つね子

